＜史料紹介＞

『繪筆乃旅』

―― オバタ・ファミリー・コレクション（The Obata Family Collection）より ――

馬　場　晶　子
東亜大学 人間科学部 国際交流学科
E-mail: sbaba@toua-u.ac.jp

《要　旨》
本稿は、1903 年に渡米した日系アメリカ人画家小圃千浦が残した自筆原稿や、自らの制作や展示に関わる記録と新聞・雑誌の記事等の切り抜き、そしてカリフォルニア州立大学バークレー校における講義ノート等をまとめたオバタ・ファミリー・コレクション（Obata Family Collection）について紹介するものである。今回は、コレクションの中から 1903 年にアメリカへ渡る船中とアメリカ到着直後の様子について記録した『繪筆乃旅』を選び、その概要を紹介する。

キーワード : 小圃千浦、Chiura Obata、The Obata Family Collection、『繪筆乃旅』、日系美術家

はじめに

19 世紀末から 20 世紀にかけて海外の移住先で活躍したいわゆる日系美術家については、複数の国を跨ぐ資料収集の困難さや言語の壁からあまり研究が進んでいない[1]。また、芸術家に関わる歴史を調査研究する場合、制作された作品群は別として、作家本人が言葉で書き記した一次史料はあまり残されていないことも多い。しかし、Obata Family Collection（以下「オバタ・ファミリー・コレクション」という）は、保存状況が良くその内容が充実していることや渡米する船中や渡米直後に記録された貴重な史料も含まれていることから、史料的価値が非常に高い。また、日系移民の送り出し国である日本側では、受け入れ国での記録について公開されている資料が少なく、その意味からもオバタ・ファミリー・コレクションに含まれる千浦自身が記した一次史料は極めて貴重である。

筆者は、大学院博士課程在籍中に小圃千浦を研究対象として選んで以降、資料収集のため 2006 年秋から数回にわたって、千浦が画家として活躍していたアメリカカリフォルニア州にて現地調査を行った。千浦の死後は、孫にあたるキミ・コダニ・ヒル（Kimi Kodani Hill）氏によって作品、遺品等が管理されていることから、ヒル氏と面談を重ね、オバタ・ファミリー・コレクションの中から他人の目に触れても問題のない複写可能な文献史料を複写させていただいた。今回紹介する『繪筆乃旅』は、その際に複写した史料の一部である。

小圃千浦について

小圃千浦（Chiura Obata, 1885-1975）は、1885 年（明治 18 年）岡山県に佐藤蔵六として生まれたが、5 歳の時に岩手県水沢市（現奥州市）の小圃家に婿入りしていた実兄小圃立二の養子となった。千浦とは、蔵六が自分につけた雅号である。養父立二は小圃六一という雅号を持つ日本画家であり、また美術教師であったこともあり、千浦も仙台の南画家茂庭竹泉（1833-1925）から絵画の指南を受けた。しかし、千浦

が 14 歳になった時、立二は、親交があった陸軍軍人乃木希典（1849-1912）に息子を軍人にすれば将来有望であると薦められ、千浦を強制的に仙台陸軍地方幼年学校（後の仙台陸軍幼年学校）に入学させてしまった。絵画の勉強を続けたかった千浦はこれに反発し、入学翌日に家出して東京へ向かった。上京後、千浦は日本画家邨田丹陵（1872-1940）に弟子入りし、また後に同じく日本画家の寺崎広業（1866-1919）にも師事した。その間、美術団体の研究会に所属し、共進会での受賞も経験したが、「もう少し広い世界を見たい」と思い立ち、17 歳の時にアメリカへ旅立つ決意をした。アメリカへの渡航の様子や渡米直後の状況については、後述する『繪筆乃旅』に詳しく描写されている。

20 世紀初頭のアメリカは、日本人移民の急増で仕事が奪われることを恐れた白人労働者たちによる日本人排斥運動が高まっていた時期であったため、渡米後の千浦は様々な偏見や差別も経験することになる。しかし、そうした困難を乗り越え、やがてサンフランシスコ市内のデパートで装飾壁画を描いたりオペラ『蝶々夫人』の舞台美術を担当する等、商業美術の分野で活躍するようになった。

千浦にとって大きな転機が訪れたのは、1920 年代の後半である。1927 年、カリフォルニア州立大学バークレー校（以下「UC バークレー」という）で教鞭をとっていた友人の美術家ワース・ライダー（Worth Rider, 1884-1960）と、同じく美術家であったロバート・ボードマン・ハワード（Robert Boardman Howard, 1896-1983) と共にヨセミテへスケッチ旅行に行き、その後ヨセミテをはじめとするカリフォルニアの自然を対象に風景画を描き発表するようになった。千浦独自の個性的な筆致で描かれた作品が評価され、やがて千浦はカリフォルニアを代表する風景画家として知られるようになったのである。また、1932 年には、旅に同行したライダーから請われ、UC バークレーで教鞭をとることになった。日本では尋常高等小学校までの教育歴しかない千浦であったが、異国アメリカで自らの力で成功を勝ち取ったという意味で、正にいわゆる「アメリカンドリーム」を体現した存在であるといえるだろう。

第二次世界大戦中には、国家安全保障の脅威になるという理由でアメリカ西海岸とハワイの一部に住んでいた日系人の多くが戦時収容所に強制移住させられたが、千浦もその一人であった。職を追われ、家財を没収され、家族とともにまずタンフォラン仮収容所に、次いでトパーズ戦争移住センターに収容された。しかし、強制移住させられて打ちひしがれている人々の姿に危機感を抱き、収容所内の希望者を対象にした美術学校をタンフォランとトパーズのそれぞれにおいて開設し、他の日系美術家たちとともに収容所内における美術教育に力を注いだ[2]。千浦の業績については、この時代に関する文献が多い。

戦後は UC バークレーの教員に復職し、1954 年に名誉教授の肩書を得て退職した。千浦はこの年帰化してアメリカ合衆国国籍を取得している。退職後は、1954 年から 1969 年までアメリカ人を率いた日本観光団を企画して引率のため毎年来日し、その努力が日米関係の改善に資するものとして日本政府によって評価され、1965 年には瑞宝章勲五等を授与された。

千浦は、1975 年バークレーにて死去した。享年 89 歳であった。

The Obata Family Collection

今回紹介するオバタ・ファミリー・コレクションは、カリフォルニア州バークレーにある千浦の住まいであった住居にて保管、管理されている史料のことを指す。The Obata Family Collection という呼称は、小圃家の歴史について調査を行い記録や講演を行ってきた family historian であるヒル氏が用いていた表現をそのまま踏襲している。

コレクションを構成する史料の概要は、以下の通りである。日本語で示したタイトルは千浦自身によって記載されたもので、原本も日本語である。『繪筆乃旅』の詳細は、次節に記す。英語で示された史料は、公的機関による日系人の業績記録の一部を英語で翻訳した原稿と、オバタ家の家族による千浦関連の記録である。

- 『小圃千浦略歴』（外部へ提示する資料として千浦自身が記載した履歴書数点）
- 日記『繪筆乃旅』
- 講義ノート（カリフォルニア州立大学バークレー校での授業のために準備したメモ）
- 展示会記録（自身の展示会について記載された新聞、雑誌の切り抜きやパンフレット等）
- 雑誌記事（千浦自身の原稿による記事を関連部分のみ切り抜いたり複写して保管したもの）
- 個人宛書簡（家族宛の手紙やはがき等、写しも含む）
- 書籍、印刷物（千浦が挿絵を担当したもの）
- 小圃六一関連資料（1928年六一の死去に伴い日本に一時帰国し1930年にアメリカに戻った際に持ち帰ったもので、六一が所有していた美術品や六一自身による小品や書簡等、そして水沢伊達家と呼ばれた留守氏の家老職を務めていた小圃家祖先に関わる古文書も含む）
- *A Photo Memoir: Celebrating of the Golden Wedding Anniversary of Eugene and Yuri Kodani, August 28, 1949–1999.*（千浦の娘Yuriと夫Eugene Kodaniの画像記録、千浦の記録も含む）
- *Haruko Obata Oral History.* Interviewed by Kimi Kodani, et al. Transcribed by Yuri Kodani. March and April, 1986.（千浦の妻春子へのインタビューをヒル氏が文字に起こしたもの）
- Japanese American History Project, University of California at Los Angeles Special Collections Library. *Obata Chiura: An Oral History.* Translated by Kimi Kodani Hill and Akiko Shibagaki. Los Angeles: University of California at Los Angeles Special Collections Library, 1996.（原本はカリフォルニア大学ロサンゼルス校に保管されており、オバタ家が所蔵するのはその写しと英語による翻訳原稿である）

以上は、2006年から2009年まで数回にわたってヒル氏を訪問した際に確認した史料群の概要である。コレクションから複写を許可された史料の中には、原本の劣化や破損を防ぐために参照用に作成されていた複写を二次的に写させていただいたものもある。また、2010年代から現在に至るまでの期間については、筆者の個人的事情で現地調査が実施できていないため、新たな発見によりコレクションが上記の内容よりも増えている可能性もあることをあらかじめお断りしておきたい。

『繪筆乃旅』

『繪筆乃旅』は、1903年7月28日に千浦が日本郵船加賀丸で横浜を出帆し同年8月12日にアメリカに入国するまでの船中および入国審査の様子、そして渡米直後の決意や生活の記録を絵図を交えつつ日本語で記述した日記である[3]。各日の最初に日付と洋上での天気が記載されている。8月1日記載ページの冒頭には『繪ふでの旅　才二便』と記されているが、本稿ではタイトルを『繪筆乃旅』で統一する。この史料は、ヒル氏が原本から複写した写しをさらに複写したものであり、そのため、史料原本の法量、体裁、員数、紙質等は不明である。また、日記に続けて、渡米直後に六一宛に送った手紙の写しも附されているが、これは1928年から1930年の日本滞在後に千浦がアメリカへ持ち帰った六一関連資料の一部であったものではないかと推測される。

本稿で特に『繪筆乃旅』を紹介するのは、この日記に記されている移民たちのアメリカへの往路の様子が絵図も加えて詳細に記述されており、移住に関する一次史料として非常に有用であるからである。日系移民の移住地への旅路を移民本人が詳細に、しかも渡航時に記録した史料が現存しているのは極めて稀で、彼らの多くの記録は渡米後の回想として書かれたものや、移住地定着後に現地での役人や研究者による聞き取り調査の際に記録されたものである。また、千浦は日本人たちだけでなく同船していた中国人たちの様子にも言及し、船内で行われた有志者による「角力會」といった娯楽行事や祈祷会など、乗客たちが船上でどのように過ごし

たかにも触れており、それゆえに『繪筆乃旅』は20世紀初頭の大型船による海外移住の一側面を新たな視点で分かりやすく伝えてくれる史料であるといえる。

加賀丸乗船初日である7月28日の記録は、検疫所で受けた目、結核、梅毒の検査に始まる入国審査の描写から始まっている。身体検査に続く口頭審査でも千浦は問題なく合格し、乗船した後の船内の部屋割りや室内の様子も図を添えて細かく記述している。千浦が渡米したのは7月末の暑い時期であり、また一番運賃が安い三等船室を利用しての渡航であったため、入室直後の船室を「一体室はむし暑くてかなり不潔である　最も果物酒。煙草。両替などゴタ／＼（ゴタゴタ）の人ごみであつた」と描写している。

海外へ移住する緊張からか、真夏の暑さや三等船室の環境の悪さゆえか、もしくは船内の不衛生に起因する食中毒であったのか、千浦は乗船早々に体調を壊している。乗船二日目の朝食が「七八銭位の辨当でどーもへんな臭がして食はれ」なかった上に、「頭が重くだん／＼（だんだん）気分が悪くなって来た」と不調を訴え、この日は「ひるめしもよるめしもろくに食はぬ　午後六時晩までねたきりであった」のである。幸い、7月29日最後の記録によれば、気分もよくなり、その後は体調面では問題なく過ごしている。

千浦が乗船した加賀丸は、当時イギリス領であったカナダのビクトリアを経由してアメリカへ向かう船であった。8月11日の記録では、ビクトリア入港の様子と港口での検疫の概要が記され、検疫合格後にビクトリアに上陸し町を散策した際の様子も描写されている。翌12日は、船が最終目的地であるアメリカシアトルへ到着した後の、最後の検疫と入国審査官と日本語通訳による質疑応答の内容が詳しく記されている。千浦は、アメリカ入国が「繪画研究の目的」であり資金も十分に所持していることを説明し、サンフランシスコが目的地であり市内の美以教会牧師である本間器七郎を訪ねる予定であると答えている。

こうして入国審査は無事に切り抜けたものの、この日は税関が終了したため入国ができないと言われ、千浦はもう一日を船内で過ごす羽目になった。やっと上陸できると意気込んでいた千浦は相当がっかりしたらしく、日記に「なんだかボンヤリしてしまった」と書いている。翌日は午前4時に船のボーイに起こされ、8時開始と言われていた税関検査が1時間遅れて始まることになったものの、結果的には問題なく検査を通過することができ、ついに目的地アメリカに上陸できたのであった。その日の最後の一文は、「今宵か北米の土に建てられたる家のベットで寝る才一晩である」と締めくくられている。この後千浦はシアトルから船でサンフランシスコまで移動したのだが、その旅程については『繪筆乃旅』には記されていない。代わりに、サンフランシスコ到着後に滞在していた美以教会で千浦が立二に宛てて書いた書簡の写しが『繪筆乃旅』に続けて記載されており、そこには「去る廿日無事上陸」したこととウマテラ号という船でサンフランシスコ港に入港したことが書き添えられている[4]。

立二宛の書簡には、千浦からお礼状を出したいが自分では「さし上兼ね」るためそちらから代わりに出しておいてほしいという76名分の住所と氏名が添えられており、その中には恩師である邨田丹陵や寺崎広業の名前も見出せる。また、アメリカでの抱負や心得などについても書かれており、アメリカ滞在目的は「洋画研究」であり「研究地として佛（本人による「フランス」とのルビあり）を希望す」としている。さらに「金を得るの道は習得の日本画を以てする」とも書いており、この時点で千浦は自分が日本画家であることを自負し、また、当時アメリカに渡った日本人画家たちの多くがそうであったように、アメリカをフランスへ洋画研究に行くための一時滞在地と捉えていたことが分かる。

19世紀末から20世紀にかけて美術研究を志し西洋を目指した日本人画家たちは、当時憧れの芸術の都であったフランスへ渡航するための十分な資金を持たない場合には、まずアメリカで労働移民たちと一緒に働きながら美術学校等で西洋美術を学び、ヨーロッパを目指そうとす

るのが常であった。移住直後の千浦は、そのような日本人画家の一人だったのである。実際には、千浦はその後アメリカに留まり、最終的には日本画の手法でカリフォルニアの自然を描く日系人画家として名を馳せることになるのだが、それは、上陸直後の17歳の千浦にはまだ見通せない未来であった。

おわりに

1975年に千浦が亡くなって以降、彼の作品は日米両国において様々な形で展示公開されてきた。近年の最も大規模な展示は、2019年11月27日から2020年3月13日までアメリカのSmithsonian American Art Museumで開催された*Chiura Obata: American Modern*である。この展示に先立って出版された*Chiura Obata: An American Modern*には、展示された作品の紹介に加え、オバタ・ファミリー・コレクションの一部が“Writings by Chiura Obata”と“Excerpt of an Oral History Interview With Obata Chiura, 1965”として掲載されており、Bilingual版ではそれらを日本語でも読むことができる[5]。

筆者は現在小圃千浦に関する論文を執筆中であるが、当初の現地調査からしばらく時間を経たのちに改めて画家本人による一次史料とその作品群を見直す中で新たな発見もあった。その発見や小圃千浦という日系美術家の存在の日本美術史上およびアメリカ美術史上における意義に関する考察については、また稿を改めて発表させていただきたい。

注

1　海外に移住しその移住先で活躍した美術家に関する呼称に関して、本稿では林洋子が『日本近現代美術史事典』で使用した「日系美術家」を採用した。林洋子「日系美術家」、多木浩二・藤枝是雄監修『日本近現代史美術史事典』東京書籍、2007、pp.482-483.

2　タンフォラン仮収容所内の美術学校への参加者について、千浦は後に、7、8歳から70歳までの生徒が、多い時には600人以上学んでいたと回想している。Japanese American History Project, University of California at Los Angeles Special Collections Library. *Obata Chiura: An Oral History.* Translated by Kimi Kodani Hill and Akiko Shibagaki. Los Angeles: University of California at Los Angeles Special Collections Library, 1996.

3　この旅の様子と渡米直後の千浦の動向については、下嶋哲朗も『サムライとカリフォルニア―異境の日本画家小圃千浦―』の中で言及している。下嶋は、日本人としては初めてカリフォルニアで千浦に関する現地調査を行い、日本における調査結果等もあわせて小圃千浦の伝記として出版した。筆者が最初に小圃千浦の業績に興味を抱いたのもこの著作がきっかけである。下嶋哲朗『サムライとカリフォルニア―異境の日本画家小圃千浦―』小学館、2000、pp.49-60.

4　消印によれば、この書簡は1903年8月26日にサンフランシスコから郵送されている。

5　Shipu Wang, ed. *Chiura Obata: An American Modern*（Oakland: University of California Press, 2018）.

Efude no Tabi: From the Obata Family Collection

Shoko Baba
Department of International Studies,
Faculty of Human Sciences,
University of East Asia
E-mail: sbaba@toua-u.ac.jp

Abstract:

This is an introduction of the Obata Family Collection: a collection of primary sources related to the Japanese American artist Chiura Obata. The collection includes Chiura's own artworks, handwritten manuscripts and memos, catalogues and records of art exhibitions, clippings of newspapers and magazines, and lecture notes Chiura prepared for his classes at the University of California, Berkeley. Among the sources of the collection, this paper focuses on *Efude no Tabi* (A Journey of a Paintbrush), which is a journal kept by Chiura during his steamship travel to emigrate from Japan to the United States and just after his arrival at the destination.

Keywords: Chiura Obata, The Obata Family Collection, *Efude no Tabi*, Japanese American artists